

知覚された無気力の主観的強度の 測定法に関する研究

長内 優 樹*

A Method of Measurement for Subjective Strength of Perceived Apathy with Single Item*

Yuki OSANAI*

“Method of measurement for subjective strength of perceived apathy with single item (MSPS)”, based on the visual analogue scale, is a simple technique for the research and clinical practice, since it is easy for participants to answer, and we can understand their subjective strength of perceived apathy from the numerical results. Therefore, it is important that we learn the advantages and the disadvantages of MSPS. In this study, I investigated the statistical validity of MSPS. The results showed that there was a statistically significant correlation between MSPS and the existing apathy scale among Japanese university students ($n=150$, $r=.570$), and that MSPS is appropriate for measuring only the subjective strength of perceived apathy.

key words: perceived apathy, measuring method, visual analogue scale

問 題

抑うつ (depression) の副次的症状としての病理的な無気力や、スチューデント・アパシーのような特異な無気力ではなく、健康な個人が日常生活で主観的に感じる無気力 (やる気のなさ) についての研究が近年、盛んになってきている (例えば、下坂, 2001)。このような無気力は長内 (2009a) によって 「知覚された無気力 (Perceived Apathy)」と呼ばれている (知覚された無気力と、その他の無気力の異同は、長内, 2009a に詳しい)。しかし、知覚された無気力の研究の現状は、初期の探索的な段階にある。例えば、従来から無気力が問題とされてきた大学生を対象とした場合、彼・彼女らが生活全般、または、特定の活動に対して知覚している無気力の強さを測定する研究を行うことは重要である。なぜなら、それは大学生の無気力の実態を把握し、そのメカニズムを明らかにすることにつながり、無気力に悩み健康相談室を訪れる学生へのアセスメン

トなどの実践に応用できる可能性があるからである。しかし現在、知覚された無気力の測定を目指した尺度は (下坂, 2001; 高山, 2006)、作成の手続きや項目内容から、無気力を引き起こす要因を尺度化している (長内, 2009a)。無論、各々の要因が無気力の知覚に与える影響は等しくないことが予想できるため、そうした項目群の合計得点は、知覚された無気力の強度を示すものではない。そのため、上述したような実態把握的な研究を行うために、知覚された無気力の強度を測定する方法が求められている (長内, 2009b)。このような状況のなか、長内 (2009a) は Visual Analogue Scale (VAS) の概念を応用して、知覚された無気力の強度を単一項目で測定する方法を提案している。VAS とは、「痛み」や「抑うつ気分」などの主観的な気分の実証的な事例研究および臨床的なアセスメントにおいて知られている方法である (例えば、廣・島, 1992; 坂本・大野・丹野, 2005)。例えば、抑うつ気分を測定する際には、10 cm の水平線上の一端を最も強い抑うつ気分、他端を正常状態とし、回答者は自らの状態がその線上のどこに位置するかを印す (Figure 1)。歴史的には、Hayes & Patterson (1921) や Freyd (1923) を起源とし、古くから心理学的研究で用いられていたとされるが (McCormack, Horne, & Sheather, 1988)、現在のような形式で広く知られるようになったのは、Aitkin (1969) 以降である。VAS が優れているのは、施行時間が短く設問が簡易なため、項目数の多い尺度を記入できない重篤な状態にある者にも使用できる点があげられる。その簡便さから、特に臨床上有用な自己評価尺度であるとされている (例えば、島・鹿野・北村・浅井, 1985)。このように VAS は、極めて簡易であるので回答意欲の低い調査対象者の回答を得やすいことが予想されるため、無気力を測定するのにも適していると考えられる。しかし、10 cm 幅の正規の VAS は、後述するように、調査法では不適切な場合もある。そこで、本研究では、VAS を応用し知覚された無気力の強度を 10 cm 幅にかかわらず、単一項目で測定する方法を便宜的に、Method of measurement for Subjective strength of Perceived apathy by Single item (MSPS) と呼ぶこととした。

今日の気分はいかがですか。
下の線上で、最も適当と思われる箇所に*印をつけてください

今までで _____ 今までで
最も悪い _____ 最も良い

Figure 1 VAS の例 (島, 他 (1985) を参考に作成)

目 的

本研究では、MSPS の妥当性を検討することを目的とした。また、知覚された無気力は、長内 (2009a) によれば、生

* 大正大学大学院人間学研究科
Taisho University, Graduate School of Advanced
Human Studies

活全般の意欲が低下する領域全般的無気力 (Domain-General Apathy: DGA) と、特定の課題 (領域) に対する意欲が低下する領域固有の無気力 (Domain-Specific Apathy: DSA) に分類される。本研究では既存の尺度を用いて、妥当性の検討が可能な DGA を研究対象とした。

方 法

調査対象者: 神奈川県内の大学に通う大学生 150 名 (男性 104 名・女性 46 名)。平均年齢 18.83 歳 ($SD=1.20$)。

調査方法および内容: 以下に列記する内容の自己記入形式の調査を 2007 年 7 月に講義時間内に実施した。回答依頼時に、文書と口頭で調査について説明し同意を得ており、謝礼は提示していない。

1. DGA の強度を測定するための MSPS: 集団形式の調査の際に VAS を用いて特定の気分の強さ (本研究では無気力の強さ) のみの回答を求めることは、回答者からみて極めて不自然な設問となる。そのため、本研究では、「以下のそれぞれの項目を読んで、ここ一週間のあなたの気分ほどの程度あてはまるかを数字に○をつけてお答えください」という指示のもと、MSPS としての「無気力な」に加えて複数の気分を表す形容語句をダミーとして提示した (7 件法)。

2. 無気力感尺度: 下坂 (2001) によって作成された、無気力を測定する尺度である。19 項目 6 件法。下坂の無気力の定義は、「日常生活全般で、自分をやる気がないと感じる」とあり、長内 (2009) の DGA に類似していると考えられるため、本研究では MSPS の妥当性を検討するための平行検査として用いた。

結 果

1. DGA の強度を測定するための MSPS: 平均値は 4.14 ($SD=1.75$) であった。また、得点分布の正規性の検定 (Kolmogorov-Smirnov 検定) を行った結果、正規性は棄却された (統計量=.128, $df=.150$, $p<.001$)。しかし、歪度 (-.141) および尖度 (-.833) はともに絶対値で 1 以下であった。

2. 無気力感尺度: 全項目を加算し、尺度得点を算出した ($M=64.25$, $SD=10.77$)。続いて、先行研究 (下坂, 2001) に倣い因子分析を行った結果、同様の因子数と項目で構成された下位尺度となった (しかし、第 2 因子と第 3 因子の順が下坂とは逆になった)。よって、第 1 因子から順に、「自己不明瞭」「疲労感」「他者不信・不満足」とした。

3. 妥当性の検討: MSPS で DGA の強度を測定する妥当性を検討するために無気力感尺度との相関係数をもとめた。その結果、 $r=.57$ ($p<.001$) であった。続いて、各下位尺度の因子得点との相関係数をもとめた結果、「自己不明瞭」が $r=.52$ ($p<.001$)、「疲労感」が $r=.54$ ($p<.001$)、「他者不信・不満足」が $r=.41$ ($p<.001$) であった。

考 察

本研究では、DGA の主観的強度を測定するために MSPS を用いることの妥当性を検討した。その結果、下坂の無気力感尺度との有意な相関関係が確認された。相関係数が中程度に留まったことは、MSPS は気分のみを測定しているのに対して下坂尺度は複数の要因を測定しているためであろう。したがって、DGA の強度を測定する際に、MSPS を用いることの妥当性が示唆された。しかし、得点分布の正規性が保証されなかったことについては、母集団の数を増やすなどして再度、検討する必要がある。さらに、健常な個人が日常的に知覚する DGA は一過性のものであることが予想されるため、本研究では再検査法などで信頼性を検討することを避けたが、今後、何らかの方法で信頼性の検討を行う必要がある。このように MSPS は課題を今後に残してはいるが、妥当性と利便性の観点から、特に集団形式の調査法にて、DGA の主観的な強度を測定する際に有用であると考えられる。

引用文献

- Aitkin, R. C. B. 1969 Measurement of feelings using visual analogue scales. *Proceedings of the Royal Society of Medicine*, 62, 989-993.
- Freyd, M. 1923 The graphic rating scale. *Journal of Educational Psychology*, 14, 83-102.
- Hayes, M. H., & Patterson, G. G. 1921. Experimental development of the graphic rating method. *Psychological Bulletin*, 18, 98-99.
- 廣 尚典・島 悟 1992 うつ病の自己記入式調査票季刊精神科診断学, 3, 429-436.
- McCormack, H. M., Horne, D. J. de L., & Sheather, S. 1988 Clinical applications of visual analogue scales: a critical review. *Psychological Medicine*, 18, 1007-1019.
- 長内優樹 2009a 大学生における知覚された無気力の研究 応用社会学研究 (東京国際大学社会学研究科), 19, 101-112.
- 長内優樹 2009b 無気力の測定法に関する展望 大正大学大学院研究論集, 33.
- 坂本真士・大野 裕・丹野義彦 2005 抑うつ性の臨床心理学 東京大学出版会
- 島 悟・鹿野達男・北村俊則・浅井昌弘 1985 新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学, 27, 717-723.
- 下坂 剛 2001 青年期の各学校段階における無気力感の検討 教育心理学研究, 49, 305-313.
- 高山草二 2006 無気力と無力感 動機の期待×価値理論からの分析 島根大学教育学部紀要, 39, 45-53.

(受稿: 2009. 4. 17, 受理: 2009. 9. 11)